

霧島の仙人

霧島は古来神仙境とされ、この世とは違う世界と思われていました。

今からおおよそ二百年ほど昔、薩摩のあるところに平瀬甚兵衛という武士がいました。何か思うにまかせぬことがあったらしく、家を捨て故郷を出てしまいました。そのまま消息が絶えていたのですが、数十年後、霧島山中にそれらしき人が住んでいるという噂がたちました。そこで、甥の得能武左衛門がはるばると探しに出かけました。

武左衛門は霧島の山深く分け入って歩き回りましたが、いつこうにそれらしき人を見かけません。あきらめて帰ろうと思ったとき、不思議な人を見つけました。顔は白いひげでおおわれ、真つ白な髪を腰まで垂らした老人です。木の葉を綴ったような布を身につけて大木の根元に眼を閉じて座っていました。武左衛門は駆け寄り、「もし、平瀬様、平瀬甚兵衛様ではありませんか。私は甥の得能武左衛門です。叔父上を訪ねてまいりました」と名乗りました。相手は目を開け、



こちらをじっと見定めてから、「昔のことはすっかり忘れてしまったが、そういう身内がおったような気もする」と静かに言いました。叔父だと確信した武左衛門は家に帰ってもらいたいと言葉を尽くして懸命に説得しました。しかし、男は、「自分が世を捨ててから何十年も過ぎた。今は仙術を習得し、名前も雲居官蔵と改めた。俗世間に帰ろうとはつゆ思わぬ。今後絶対、ここに来てはならんぞ」と答え、老人とは思えぬ軽やかな身のこなして山奥に走り去ったのでした。武左衛門はなすすべもなく故郷に帰って行きました。

それ以来、その男の姿を見た人は誰もいません。しかし、その後、霧島山に入ると、何者かが木から木へ飛び移ったり傍らを風のように駆けぬけたりする不思議な気配を感じることがしばしばあったので、やはり仙人が住んでいると言い伝えられたそうです。



原話 橋南谿『西遊記』
文／有馬英子 絵／二石綱夫